

# To の意味論

## —英語教育への応用を目指して—

加藤 鉦三・花崎 一夫・花崎 美紀

### 1. はじめに

一般に販売されている英和辞典を見てもすぐに気がつくことであるが、英語の前置詞 to には実に様々な意味があることが分かる。リーダーズ英和大辞典では 15 の用法に分類されているほどである。しかし、英語学習者に対してこれらの用法を暗記して覚えなさいというだけでは、学習者の学習意欲をそぐことになり、結果として to の様々な用法を習得させることは難しいと言わざるを得ない。

話をわかりやすくするために、日本語の「認める」という語句に少なくとも存在する 3 つの用例・用法について考えてみる。

- (1) a. 用例 1「途中退室は認められない」  
用法 1 permit
- b. 用例 2「特に病歴は認められない」  
用法 2 find
- c. 用例 3「自分の落ち度を認められない」  
用法 3 admit

このように「認める」には少なくとも 3 つの用法があるわけだが、これらを記述し、日本語の学習者にこれらの用法を暗記しなさいと言っても、学習者にとっては学びやすいとは到底言えない。そこで以下のような「用法の条件」を見てみる。

#### (2) 用法の条件

「認める」の permit の用法には、目的語が動作か動作名詞でなければならない、という条件がある。

find の用法には、目的語が「地と対比するもの」でなければならない、という条件がある。

admit の用法には、目的語が命題もしくは

はそれを名詞表現にしたものでなければならない、という条件がある。

日本語の「認める」には用法 1 とした permit の用法があるが、その用法は用法 2・3 が使われる条件下では出てこない。その理由は (1a) と (1b) (1c) では文脈が違うからである。このように用法の条件を特定し、さらになぜその様な用法が存在するのかについての説明を加えれば、学習者にとって理解しやすいものになるのは間違いない。そこで本稿ではこのような見地から、前置詞 to に存在する様々な用法の条件を解明し、それを英語教育の現場で寄与しうる形で提示することを主眼に置く。

次節では、前置詞 to に関する先行研究とそれらの問題点について取り上げ、第 3 節では本論として、前置詞 to の用法条件について考察するものとする。

### 2. 先行研究とその問題点

前置詞 to の意味に関する先行研究には、大きく分けると 3 つの流れが存在する。

- (3) 先行研究の 3 つの流れ
  - ①到達点（動きを伴う）
  - ②方向
  - ③ to は動きを持たない

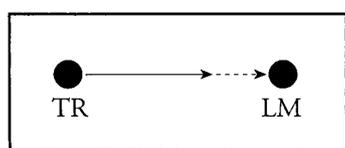
このうち①の立場をとる研究には、Lyons (1977) 上野 (1995)、Langacker (1987)、岸本 (2001)、小林 (2007)、井上 (2008) などが存在する。

- (4) a. He sent a letter to Susan.  
b. He sent Susan a letter.

一例を挙げると、Langacker (1987:39) によれば、(4a) で前置詞 *to* が使われているのは、*the letter* が通っている経路を強調し、*Susan* を到達点としているためということである。したがって、前置詞 *to* は到達が想定される文脈で使用されていると主張していることになり、別の言い方をすれば、*to* に「到達点」の意味があると考える立場を取っている<sup>1</sup>。

次に②の立場をとる研究、すなわち *to* は方向を持つものであるとする先行研究には、松原 (1999)、Haspelmath (2003)、国広 (2005) 等が挙げられる。一例を挙げると、国広 (2005) では、(5) のような *to* の原図形を想定している。

(5)

*to* の現象素(原図形)

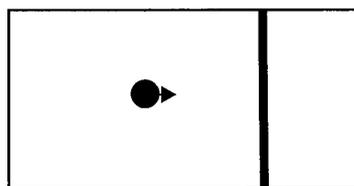
国広 (2005: 318) によれば、この図はTR(トラジェクタ)の方向性、移動の経路、含意としてのLM(ランドマーク)との接触を示している。ただし、必ずしも *to* そのものの中に「到達」の意味を読み込んでいるわけではないことに注意されたい。例えば、*the room to the back of the house* というのは、「心理的な目で家の前の部分から後ろの方へたどって行って家の後部にたどり着いたところにある部屋」という意味になるわけで、このような例の場合には、心の目の移動、すなわち *to* 意味の中に「方向」を想定している訳であるが、「到達」はあくまでも「方向」を想定した結果として出てくる含意であるという立場を取っている<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> このような言い方をすると、*to* が到達点を含意するのは、共に使用されている動詞の *send* が到達を含意する動詞であるからであり、*to* 自体には到達の意味があるわけではないという反論が出てくると考えられる。我々自身もこのような疑問を持っており、このことは、後に独自の主張をするきっかけにもなっている。

<sup>2</sup> ここで①の立場(到達を想定する立場)と②の立場(方向のみを想定する立場)は基本的に大差ないのではないかという疑問が生まれてくると考えられるが、この疑問も次節での我々の立場が生まれてくる背景になっていることに注意されたい。なお、この用法に対する本稿の分析は(12)の説明を参照されたい。

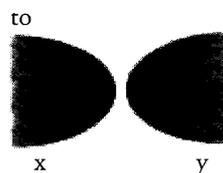
最後に③の立場をとる研究、すなわち *to* は動きを持たないとする先行研究には、Tyler and Evans (2003)、田中 et al (2006)、和田 (2009) などが存在する。例を挙げると、Tyler and Evans (2003) においては、*to* の原図形は(6)であるという立場をとっている。

(6)



Tyler and Evans (2003: 150) で述べているように、経路と動きは *to* の意味の中には含まれないという主張を行っている。また、田中 et al (2006: 103) では、*to* には移動の着点や目的などと方向性が逆ともとれる「原因」などの意味をもつ例が存在することから、「移動」や「方向性」などの概念を排したものの、すなわち「向き合う」の意味を想定している。

(7)



以上 *to* の意味に関する3つの主な先行研究を概観したが、いずれの立場をとっても説明できないと思われる *to* の用法が存在する。以下の例を見て欲しい。

- (8) a. There is not much *to* it. (Lakoff 1987)  
 b. This is the handle *to* the broom. (和田 2009)  
 c. Amy woke up *to* the sound of her doorbell ringing. (Cobuild)  
 d. I had a two-door Chevy that got 15 miles *to* the gallon. (COCA)  
 e. Diana is standing *to* my left. (Tyler and Evans 2003)

順番に見ていくと、(8a) の *to* にはそもそも方向

も動きも感じられないし、(8b) についても同様のことが言えると思われる。さらに、(8c,d) になると、一見、なぜ to が使われているのかでさえ説明が困難なように見える。最後に (8e) であるが、国広 (2005) では心理的な目の移動を想定しているが、この例についてはそもそも移動を想定することに問題ないかも含めて次節で検討することとする。

これらの例からも分かるように、従来型の to の意味記述では to の意味論を語るには程遠いことが分かるし、仮にそれらの意味記述を認めたとしても、上述の (8) のような例については、例外として処理せざるを得ないことになり、これでは英語学習者が to の用法を習得する際に障壁とはなっても手助けにはならないことは明らかである。そこで次節ではこのような問題を解決するような to の意味論を展開し、英語教育への寄与の可能性を探りたい。

### 3. 本論

To の意味の考察で最も素朴な形は、to を導く動詞等の意味を to の意味の記述に持ち込んでいく、というものである。先行研究では、to の意味をそれを導く動詞等とは切り離して考えるという方向性はある程度見えている。しかし、to の目的語が文中で果たす役割を to 自体の意味と切り離して考える、という方向性は先行研究では見えておらず、それが (8) のような問題が生じる直接の原因となっている。本稿の考え方の特徴は、to 自体の意味を、動詞等が表す意味と切り離して考えるのは当然として、更に、to の目的語が文中で果たしている役割をも to 自体の意味とは明確に切り離して考えている、というものである。そのような考え方のもとでは、to 自体の意味は「矢印」でしかない<sup>3</sup>。本稿の予定する結論は次の通りである。

(9) a. to の語彙的意味は「矢印」である

<sup>3</sup> 「矢印」には多分に視覚的イメージがあり、その限りにおいて、「矢印」はあくまでも比喩的説明の感があり、分析が比喩に基づくものである限り、本質論にはならないという趣旨のコメントを匿名の査読者からいただいたが、我々が「矢印」を視覚的なイメージで捉えていないということは、後に見る図4や図5から明らかであることに注意されたい。

- b. 解釈は次の二つが決定する
- (i) 矢印がどのような意味領域に置かれているのか ([ ] で表示する)
  - (ii) to の目的語がその意味領域において何として現れているのか (< > で表示する)
- c. 辞書にある「用法」はプリミティブな語彙的意味ではなく、(b) により決定される派生的概念である

to の意味は「矢印」であり、よって to がある時には、そこに何らかの形で「矢印」がある。to の目的語は、「矢印」の先にあるものであり、場合によっては終着点、場合によっては結果、場合によっては対象、場合によっては方向などを表すことができる。よって、to の目的語が到着点であるかどうかは、to が決めるわけではなく、to の目的語が何を表すと理解されるかは、文の内容、(9b) の言い方では to がどのような意味領域に置かれているか、によって決定される。次は、(9) の考え方のもとでの、意味領域と to の目的語が表すものの対応を概略的に示したものである。

およその意味領域	to の目的語が表すもの
[移動]	<着点>
[変化]	<結果>
[進行]	<結果>
[時間]	<終点>
[働きかけ]	<対象>
[加える]	<対象>
[比較]	<尺度>
[評価]	<評価者>
[位置取り]	<方向・位置>
[ペアがあるもの]	<ペアの片割れ>
[対応 (あわせる)]	<あわせる対象>

以下では、先行研究で扱っている用例に加え、先行研究では扱いが困難であると思われる (8) のような用例を、(9) の考え方では問題なく扱うことが出来ることを示していく。

#### 3.1 空間

本節では、to が空間的な意味領域に置かれた用例を見ていく。

- (10) a. I went to New York. (COCA)  
b. [移動]、<着点>

(10) では動詞が移動を表すため、to は [移動] という意味領域に置かれた矢印である。その矢印は〈着点〉に向かっている。

- (11) a He stands to the side of the panel. (COCA)  
b. [位置取り]、〈位置〉

(11) では動詞が位置の指定を要求するため、to は [位置取り] という意味領域に置かれた矢印である。その矢印は〈方向〉に向かっている。この用法では、to の目的語は left、right や east 等、の「方角・方向」そのものを指すか、または (11) の side や front や back のように「位置」そのものに限られるという条件が課されている。先行研究でこの用法がうまく扱えないのは、ひとえに、この用法は to の目的語が「位置・方角・方向」そのものでなければならない、というこの条件を見落としているからである。本稿では、to 自体の意味を、to の目的語の果たす役割とは明確に切り離して考えているため、このように、to 自体の意味は「矢印」でしかない、という扱いが可能になる<sup>4</sup>。しかし先行研究では to 自体の意味を to の目的語の表す役割と混同しているため、「位置・方角・方向」が位置取り動詞と共起する際の条件であるという観察に至らなかったものと思われる。この点は次の (12) にも当てはまる。

ここで「条件」という言い方をしているが、これには少し解説が必要であろう。本稿の立場では、(11) で言えば、[位置取り] という意味領域に置かれた矢印が意味的に整合するためには、to の目的語が「位置・方角・方向」そのものを表すものでなければならない、という意味で言っている。従来の言い方では、この用法は、「to には位置・方角・方向の意味がある」ということになる。その言い方では、例えば he stands to Tokyo という組み合わせが、どうして「彼は東京の方に向かって立っている」という解釈にならないのかが分からない。しかし本稿の考え方では、「to 自体に位置・方角・方向の意味があるのではない。to Tokyo では to の目的語が位置・方角・方向そのものではないためその解釈は得られない」と正しく記述す

<sup>4</sup> to の意味は「矢印」であると考えすることで、動詞や TR や LM が文全体の中で果たしている役割に目が行くことになり、その段階で初めて用法の「条件」の抽出が可能になる。このことこそ、我々が第一義的に主張したい点であることに注意されたい。

ることができる。一方、(11) と同じような he goes to Tokyo では、to の目的語に課される条件は、「着点となり得る」というようにとてもゆるい条件であり、Tokyo は着点となり得るため、意味が整合する。

次は、動詞の意味や to の目的語ではない要素が用法の条件になっている例である。

- (12) a. They live next door to us.  
(研究社英和中辞典)  
b. [位置取り]、〈LM〉

ここでは動詞が位置指定を要求し、その [位置取り] という意味領域にある next が「何の次であるのか」という更なる位置指定を要求している<sup>5</sup>。to はそこに置かれた矢印であり、その矢印は〈landmark〉に向かっている。この用法では、next のような相対的位置取りを言う表現があることが条件になっており、to の目的語はその相対的位置取りの基準点となる LM を表示する。ここでは、to の目的語が LM であり得るものという条件もあるが、それよりも、next のような相対的位置関係を表す表現がより強い条件となっている。

### 3.2 同時

本節では、to が時間という文脈に置かれた用例を見ていく。

- (13) a. He woke up to the alarm. (COCA)  
b. [対応]、〈対象〉 = 音

何かと何かの [対応] を言う意味領域において、矢印は動詞の表すイベントが〈対象〉に対応していることを表示する。動詞部分は瞬間的なイベントを表し、to の目的語はそのイベントと時間的に [対応] する、つまり「同時」に生じる、突発的な音である。

<sup>5</sup> They live next door は to us がなくとも正しい文なので、少なくとも「要求する」は表現として言い過ぎかもしれないという趣旨のコメントが匿名の査読者から寄せられたが、その指摘は妥当ではない。なぜなら、to us のない They live next door のような文が発話されたとしても、それはどの部屋の隣であるかを言わなくても了解されている時のみであるからだ。つまり、ここでは明らかに「要求」されていると言わなければならない。



図4 いわゆる「同時」用法

本稿の立場では、to 自体に「同時」という意味を認めるのではなく、to の目的語が音または音源となるものであるという条件が成立する時に、矢印である to の意味が対応関係を結ぶものとして意味的に整合する、と考えることになる。

一方、もし to に「同時」というプリミティブな語彙的意味があったとしたら、例えば *She was singing to him.* に「彼と同時に歌っていた」という解釈がない理由を説明しなければならない。また、もし「同時」用法に条件を設定したとしても、「同時」がプリミティブな語彙的意味であるとする立場では、なぜそのような条件があるのかが分からない。しかし、本稿の立場では、瞬間的なイベントがあり、突発的な音がそれと to で結ばれていれば、その二つが時間的に [対応] している、という解釈が得られる。しかし *She was singing to him.* では to の目的語が音でないため、時間的に対応するという解釈は得られない。「同時」用法は to の語彙的意味ではなく、動詞、to の目的語と「矢印」の3者の組み合わせから派生的に得られる概念である。

(13) は一つのイベントと音が対応するという内容であるが、(14) のようにそれが切れ目なく連続的に起こる時にも使うことができる。

- (14) a. *The crowd danced to the music.* (COCA)  
b. [対応]、〈対象〉 = 音

(14) では、何かと何かの [対応] を言う意味領域において、矢印は動詞の表すイベントが〈対象〉に対応していることを表示する。(13) では、音とイベントが同時であることから、音が動作のタイミング、つまりきっかけである、という解釈が得られる。一方この (14) では、手足の動き一つ一つが音楽のビートに連続的に対応するということから、ビートにタイミングを合わせて踊るという解釈が得られる。

### 3.3 所属

本節では、矢印が「A が B に所属する」という

対応関係を表示する用例を見ていく。

- (15) a. *the key to the door / an answer to the question*  
(COCA)  
b. [ペアの存在]、〈ペアの残りの片割れ〉

(15) では、[名詞 A to 名詞 B] という構造で [ペアの存在] という意味領域が成立しており、矢印は、ペアの片割れが to の目的語である〈ペアの残りの片割れ〉に対応していることを表示している。ここでは A と B がペアを構成していることが用法の条件となっている。

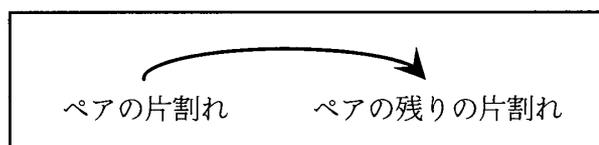


図5 いわゆる「所属」用法

to に「所属」という語彙的意味を認める立場では、例えば *the person to the society* で、「その社会に属するその人物」という解釈が得られないことは説明されない。一方、本稿の立場では、一個人と社会ではペアにならないため [ペアの存在] が成立せず、その結果「所属」の解釈が得られないということが正しく帰結する。

(15) では、ペアが名詞句の内部に存在している。しかし次のように文レベルでペアの対応関係を言うこともできる。

- (16) *There is not much to it.* (= (8)) (Lakoff1987)  
それに対応するものが多くない  
=「それについて言うべきことがあまりない」  
(17) *There is a certain coldness to him.* (ジーニアス英和辞典)  
彼とある冷たさが対応する  
=「彼にはどことなく冷たいところがある」

(16)(17) のように、to を使って文レベルで対応関係を言う場合には、文は *there* 構文 (=存在文) に限定されるようである。そういう条件がこの用法に課されるという事実は、to 自体に「所属」という語彙的意味を認める立場では説明できないものと思われる。しかし本稿の立場では、それは容

易に説明される。というのは、本稿の立場では、この用法が成立する意味領域が「ペアの存在」であるため、文の内容が、「B に対応する A という主語が存在する」というものでなければならないからである。

### 3.4 目的

本節では、あたかも to 句が目的を表示しているかのような用例を見ていく。

- (18) a. He came to my rescue./ We sat down to dinner.  
(研究社英和中辞典)

b. [動作の連鎖]、〈2 つめの動作〉

(18) では、[動作の連鎖] という意味領域において、矢印は、1 つめの動作から to の目的語である〈2 つめの動作〉に移行することを示している。この用法では、to の目的語は rescue のような動名詞または dinner のような動作と密接に結び付いた名詞であることが条件となっている。矢印である to は、意図的な動作からその次の動作に移行することを表す。このメカニズムは、to 不定詞の「目的」用法と基本的には同じものであろう。

### 3.5 結果

最後に、本節では to 句が動作の結果を表す用例を見ていく。

- (19) a. He ferreted out the secret to his cost.  
彼はその秘密を探り出してひどい目にあった (研究社英和中辞典)

b. [イベントとその結果]、〈結果〉

(19) では、[イベントとその結果] という意味領域において、矢印は、イベントの帰結が to の目的語で表示される〈結果〉であることを示している。ここでは [イベントとその結果] のイベントは、「彼が秘密を探り出した」という、文で表示されているイベントそのものであり、その結果は「彼の損失」である。しかし、この用法は、次のようにイベントが表面に現れていない形の方がはるかに生産性が高いようである。

- (20) a. To my surprise, I won. (COCA)  
b. [イベントとその結果]、〈結果〉  
c. I LEARNED it (= I won) to my surprise.

イベント 結果

(20) は to 句自体の意味構造は (19) と同じであるが、しかしここでは〈結果〉をもたらすイベントは文中に現れている I won ではなく、文中に現れていない I LEARNED である。この用法の条件は次のようにまとめられる。

(21) この用法の条件

1. to の目的語が感情表現である
2. to 句は離接詞である ((19) では付加詞)

条件 1 は、イベント LEARN の主語が感情を持つ人間であり、イベントを観察した結果ある感情が沸き起こる、という事態が非常に自然だからであろう。条件 2 は、to 句は「主節」である I won を直接的には修飾していないことによるものである。もし「結果」の意味が to 自体にあるとするならば、例えば he wrote some stories to a book という文が「彼はいくつもの物語を書いて本にした」という解釈を得られないのか、という疑問に答えることはできないであろう。しかし本稿の立場では、to 自体に「結果」という意味があるのではなく、(明示されていない) イベントと感情表現の両方がある時に、矢印は両者をつなぐものとして意味的に整合する、と考えるため、「book は感情表現ではないため意味が整合しない」と容易に答えることができる。

## 4. まとめ

以上、本稿では、to に様々な意味があるとする立場は、to の意味と to の目的語が文中で果たしている役割を混同しているのであり、そのような立場では説明できない事例が多く存在することを確認した。次いで、to 自体の意味は「矢印」でしかなく、様々な用法は、実は to の意味ではなく、to の目的語が文中で果たしている役割なのである、という立場では、そうでない立場では説明できない事例も容易に説明される、ということを見つけた。

to の目的語が果たさなければならない役割は、それがどのような意味領域に置かれているかによって決まってくる。例えば、移動という文脈では移動先が求められ、対応関係という文脈では対応先が求められる。だから、例えば移動という意

味領域において矢印があれば、その矢印の先には「移動先」とみなすことができるものが置かれていなければならない。本稿でしばしば言及した「条件」とはまさにそれである。

これを英語学習という文脈でとらえ直すと、to の諸「用法」の学習においては、従来の英和辞典に出ているような「用法」を覚える、というアプローチではなく、典型的な例文で動詞と to 句をセットで記憶する、という学び方になろう。教室では上で見てきたような条件を暗記させることが現実的ではない。しかし、典型的な例文においては、そのような条件が当然ながらそろっているため、実は条件込みで記憶することになる。

現状では、学習者は to の諸「用法」を to の意味として認識している。そのため、英作文という場において、3.1 節で触れた he stands to Tokyo. のようなエラーが頻出することになる。これは英語教員なら誰もが直面する課題ではないだろうか。

しかし本稿の立場のように、「～に向かって」という意味になるためには to の目的語が〈位置・方角・方向〉を表すそのものの単語でなければならないということを踏まえて、典型的な例文によって用法を理解させることで、このようなエラーを少しでも減らすことができるという方向性を提示できているとしたら、本稿の目的は達成されたことになる。

### 引用文献

- Hasperlmath, Martin (2003) "The Geometry of Grammatical Meaning; Semantic Maps and Cross-Linguistic Comparison" *The New Psychology of Language* vol2 pp. 211-242.
- Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 井上 朋子 (2008) 「前置詞 to から to 不定詞への文法化: 日本語後置詞「に」との比較における考察」『常葉学園大学研究紀要 (外国語学部)』24 号 . pp. 81-100.
- 岸本 秀樹 (2001) 「二重目的語構文」『日英対照動詞の意味と構文』影山太郎編 . 東京: 大修館 . pp. 127-153.
- 小林 資忠 (2007) 「前置詞 of と to の用法」*The English Teacher's Magazine*. December 2007. pp. 74-76.
- 国広 哲弥 (2005) 「解説」『英語前置詞の意味論』国広哲弥他訳 . (Tyler and Evans (2003) の訳) 東京: 研究社 .
- Lakoff, George (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* voll1: *Descriptive Application*. Palo Alto: Stanford University Press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics 1*. Cambridge: Cambridge U.P.
- 松原 史典 (1999) 「補文標識か、前置詞か— for/to/of の統語的振る舞いについて—」『英語教育』Vol48-10 pp. 49-52.
- 田中 茂範、佐藤 芳明、阿部 一 (2006) 『英語感覚が身につく実践的指導—コアとチャンクの活用法』東京: 大修館 .
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge U. P.
- 上野 義和 (1995) 『英語の仕組み』東京: 英潮社 .
- 和田 四郎 (2009) 「前置詞 to と in の意味的相違」『英語語法文法研究』16. pp.5-20.